

## 大学教育の質保証 ④

## 速報：学生は遠隔授業をどう受け止めたか

大学院教育強化推進センター／高大接続・全学教育推進センター 市村 光之

新型コロナウイルスの流行に伴い、遠隔授業という想定外の事態が続いています。私たち教職員は試行錯誤の連続でしたが、学生たちも大学構内立ち入りが制限され、対面授業が受けられない状況に戸惑い、様々な不便や不安を抱えながら学業を続けています。今回はそうした学生たちが、遠隔授業をどう受け止めたか、がテーマです。

高大センターでは、前年度で完了した大学教育再生加速プログラム（AP事業）により、学生が主体的に学びをデザインするツールとしてのYNU学生ポートフォリオを整備しました。学部生全員が半期ごとに入力する「学生プロフィール」では、学修・生活行動を測定しています。秋学期は遠隔授業の動向について、45問の設問により学生たちの実態を明らかにすることを試みました。10/16に入力を締め切り、現在集計・分析中ですが、その一部を速報として紹介します。なお、詳細な報告書は11月中に公開予定です。

## 課題が多すぎる、という学生の叫び

「課題が多すぎる」という声が、本学に限らず全国の大学生たちから聞かれます。外出もままならず、対面の交友もできない状況で部屋に籠り、ひたすらパソコンに向かい遠隔授業を受講する学生たちの悲痛な叫びです。筆者が春学期開講1か月の段階で担当科目（1年生中心）で実施した「遠隔授業動向 予備調査結果」（6月にFDセミナーで各学部で紹介）や履修生へのヒアリングから整理すると、学生の「多すぎる」には複数の意味があるようです。

- ①個々の課題の量（所要時間）は少ないが、回数が多い：これが最も多そうです。特に下級生は十数科目履修していますので、毎週科目の数だけ課題をこなさなければなりません。タイムマネジメントをしっかり意識して実行しないと提出期限に間に合いません。
- ②1回ごとの課題の量が多い：①の一部には量が多い科目もあるでしょう。履修科目が多い学生は1科目に使える時間は限られますので、こなすのが大変です。
- ③課題が難しすぎる：講義内容に比べ課題のレベルが高度すぎる、と学生が感じる課題もあるようです。講義内容が説明不足なケースと、課題が難しすぎるケースが考えられます。つまり授業設計の問題です。
- ④課題に関する説明がわかりにくい：課題の指示内容が曖昧で何をすればよいかわからなかったり、それに取り組む意図がわからなかったり、説明不足もあるようです。対面やライブ授業であればその場で質問できま

すが、遠隔授業では、確認に時間がかかります。課題の意義がわからなければ、取り組む意欲も湧きません。

- ⑤提出物に関してフィードバック（評価やコメント）がない：量の問題と共に、この不満が多いと感じます。提出した課題を教員が受け取ったかどうかかわからない不安、提出した内容が妥当かどうかかわからない不安、さらに反応がない中で課題を提出し続ける虚しさなどが入り交じり、学生たちは精神的に辛い思いをしています。

加えて、他者との交流がない状態で部屋にこもって、ひたすらPC画面とにらめっこの状態は精神的にも辛く、眼精疲労や頭痛、肩こりなど、心身の不調を感じる学生が多そうなのが心配です。

## 週あたり学修時間は3時間増加

では、春学期の実態はどうだったのでしょうか。図1は、今回の学生プロフィールで測定した春学期の学修・生活行動の週あたり時間の全学平均を、昨年春学期と比べたものです。授業相当時間と授業外学修時間は3.3時間増加しており、1日換算で25分程度増えたこととなります。授業や授業外学修が増えると授業と係わらない自主勉強は圧迫されて減りそうですが1.6時間増加し、就活関連も0.3時間増加しましたので、学業・就活などの社会活動で合計5.2時間増加したことになります。グラフは示しませんが、1年生から3年生までは全学部で増加しています。一方、4年生は前年度と変化はありませんが、これは履修科目が少ないからでしょう。

逆に社会活動で減少した項目としては、部活・サークル活動が3.5時間、アルバイトが1.5時間、通学時間1.6時間で、合計6.6時間です。これら減少した時間が、上述の学業・就活などの社会活動の時間に充当された形で

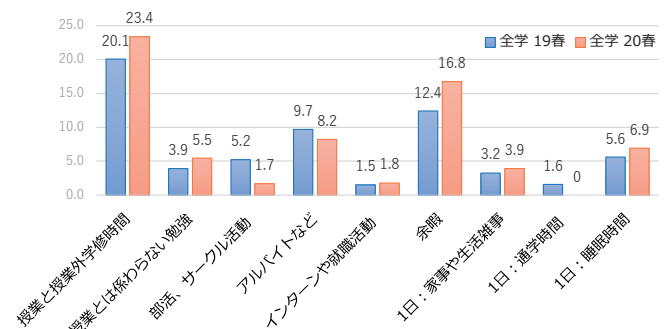


図1 学修・生活時間の推移（週あたり全学平均）

す。さらに、プライベートな生活時間を見ると、余暇は4.4時間、家事や生活雑事は0.7時間、睡眠も1.3時間増加しています。課題の増加に伴う学業が負担で余暇や睡眠が圧迫されているわけでもなさそうです。

学生たちが実態に即した時間を入力した前提で考えると、これらのデータからは「時間」の観点で、遠隔授業に伴い変化した学業が学生たちの生活を圧迫していることにはなりません。つまり、学生たちが感じる「課題が多すぎる」は、学修時間という意味での量ではなさそうです。

## 授業+課題の内容/量の適正化と、フィードバックがカギ

図2は「遠隔授業になった春学期は1科目当たりの課題が増えたと思うか」を尋ねた結果です。88%の学生が増えたと感じており、2倍または3倍以上の回答が過半数です。遠隔授業になり学生の反応がわかりにくいことから、各科目で課題により修得度をみる頻度が増えたので、課題の数は確かに増えました。グラフは示しませんが学部別にみると、教育学部、理工学部で課題量が増えたと感じる学生が多いようです。経済学部、経営学部も増加したと答えた学生が多いですが、他学部に比べると、これまでと変わらない、または減ったと感じる学生がやや多いです。

次に、図3の「課題量の増減に伴い、授業1回当たりの全体の学修時間は変わりましたか」の回答を見ると、少し様子が変わります。1科目当たりの課題が増えたとの回答は88%（図2）ですが、授業1回当たりの学修時間が増えたと答えた学生は65%に留まるのです。課題は増えたが授業時間は減っているので変わらないと答えた学生も16%います。対面授業であれば授業時間はキッカリ90分ですが、遠隔授業では科目により、録画視聴60分のように講義が減り、課題の負担が増えても相殺されたということです。さらに、減ったと答えた学生も11%存在します。これはたとえば、録画動画配信型授業を視聴する時間が30分で、その後の課題が120分と想定した授業

で、課題の所要時間が60分で済んだケースが考えられます。対面授業で講義90分+授業外の課題60分の授業を、遠隔授業で講義相当30分+自主学习や課題120分で設計した場合、合計時間は同じですが、学生は授業外学修の時間が大幅に増えた分、負担感が大きくなり、授業1回当たりの学修時間が増えたと回答するケースもありそうです。課題の数は増えましたので、それらを期限内に次から次へとこなす精神的負担も、増えた感の増加に拍車をかけている面もあるでしょう。

なお、図3では授業1回当たりの学修時間が増えた人は65%、減った人は11%ですので、週あたりの全体の学修時間は大幅に増えてよいはずですが、図1では3時間の増加に留まっており、やや乖離があります。実数字で回答する設問と、感覚的に回答する設問の差かもしれません。

次頁の図4は、課題の負担要因を学年別にまとめたものです。課題の回数と1回ごとの量が1～3年生の主な負担要因になっています。各課題の所要時間は学生本人の能力や手際の良しあしにより、個人差があります。そうした個人差が最小限になる適正な難易度と量を見極め、課題を設定するのは簡単ではないでしょう。今後、経験を蓄積しつつ適正量を探らなければなりません。

加えて1年生では、フィードバックがないことを挙げた人が35%と、上級生に比べ突出して多いのが目立ちます。思い起こせば筆者も、新入生の時はレポート課題の評価基準がわからず、どこまで質を高めれば単位が取れるのか、と不安を感じたことを覚えています。提出した課題への評価や教員からの反応がないまま、確認や相談ができずに課題に取り組み続けるのは辛いでしょう。「課題が多すぎる」という学生たちのことには、単に課題の量や頻度だけではなく、そうした不安感や孤立感も含まれています。大学での対面授業やレポート課題等を経験せずに遠隔授業に突入した分、言うまでもないことですが、特に新入生には特段の配慮が必要です。

授業時間が時間割で定められた対面授業と異なり、遠隔授業では授業形態も実施時間もさまざまです。講義に相当する内容と授業外学修（課題等）をいかに組み合わせ、適正化を図るか。部屋に籠りひたすらPCに向かう

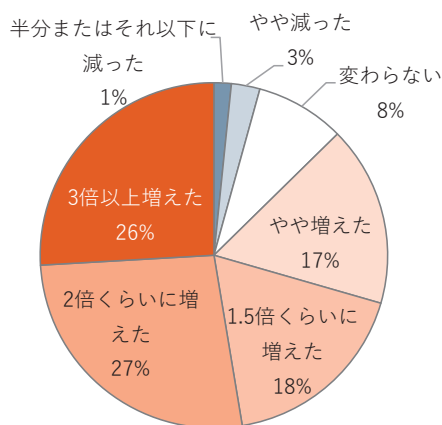


図2 春学期は1科目当たりの課題が増えたか

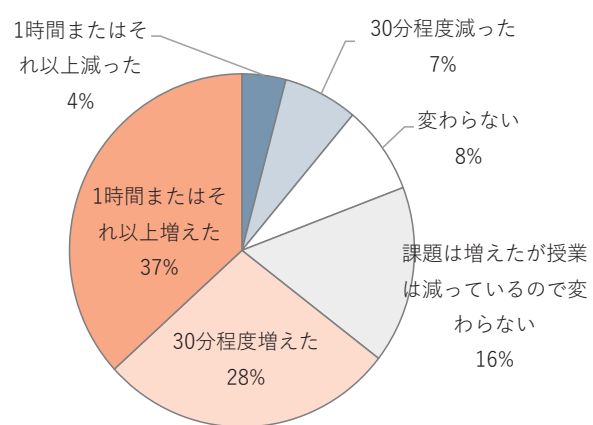


図3 授業1回当たりの全体の学修時間は変化したか

学生たちに、いかに課題のフィードバックや学習の助言をするか。教員側の負担もありますが、学生たちが無理なく学業を進めるために、授業設計上の喫緊の課題と言えます。

これまで課題を課さなかった科目を含め、毎回のように課題を課す状況になりました。筆者の個人的な見解になりますが、講義と課題をうまく組み合わせることができれば、より学修効果を高める授業を実現できそうです。大学設置基準には、授業時間（2単位科目であれば1回あたり2時間）と授業外学修時間（同4時間）が定められていますが、残念ながら実態は異なります。そうしたそもそも論を含め、今は大学教育のありかたを再検討する好機かもしれません。

## 評判がよくない資料のみ提供型授業 今後の可能性は？

前述の春学期「遠隔授業動向 予備調査」で浮上したもう一つの課題は、資料提供のみの授業タイプでした。

「授業料を払ってるにも拘らず資料を読むだけでは代替になっていない」、「気楽にできるが一番退屈」、「科目により資料の質の差が大きい」、「資料だけでは理解がむずかしく、質問してもなかなか返事がこない」などの不満の声が学生から挙がりました。春学期の授業アンケートでも、満足度等が最も低かったのがこの授業タイプでした。

図5は、「講義中心の授業であれば資料のみの提供型でよいと思うか」を訊いた結果です。全学平均では賛成54.0%、反対46.0%と拮抗しつつ賛成派が勝ります。学部別では経済、経営、教育学部で賛成派がやや多く、理工、都市科学部では反対派が多いです。グラフは示しませんが、学年別に見ると1年生は反対派がやや多く、2年生以上では逆転します。

心配したほど反対派は多くありませんでした。この結果をどう解釈するか。この数値データだけでは推測にすぎませんが、1つには講義中心の授業に限定して質問したことがあるでしょう。わかりやすく工夫した教材を資料として提供した科目、開講段階では不十分でも途中から学生の声を反映し改善した科目もあるでしょう。一方

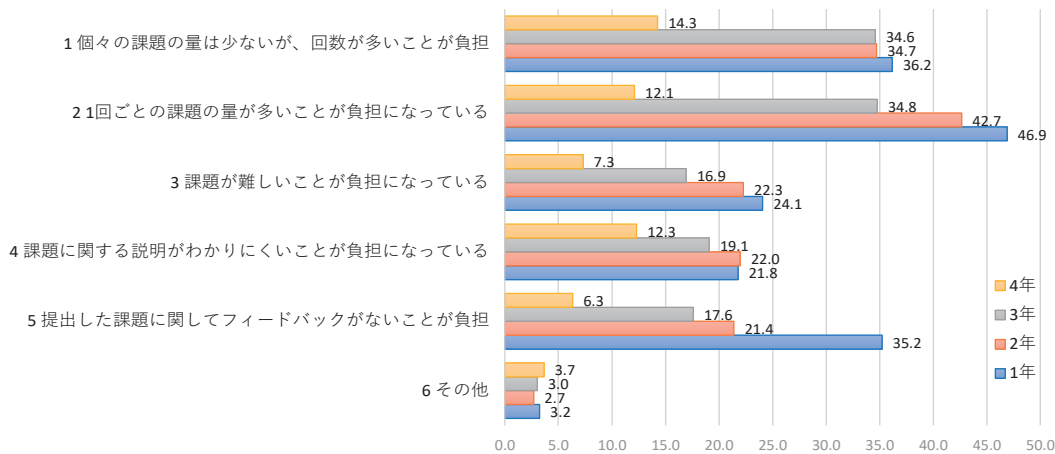


図4 課題などが物理的・精神的に負担になっているか (主な要因を最大2つまで選択)



- 大学の授業としての価値がないので、資料のみの提供でよいとは思わない
- 授業の臨場感がなく集中が続かないので、資料のみでよいとは思わない
- 説明がないと理解に限界があるので、資料のみでよいとは思わない
- 教員や他の学生に会う必要がなく気楽なので、資料のみの提供でよい
- 授業支援システムやチャット等で質疑応答あれば、資料のみでよい
- 時間を気にせず自分のペースで学習できるので、資料のみでよい

図5 講義中心の授業であれば、資料のみの提供型でよいと思うか



で、資料を読むだけで単位を稼げるなら楽でよい、と考えた学生も少なからずいるように思います。

全学平均で最も多い回答は「時間を気にせず自分のペースで学習できるので資料のみでよい」です。この回答には、講義を聴くだけの授業なら資料を読むのと同じ、通学の手間が省ける等のニュアンスも含みそうです。大学の講義を聴くことと、資料を読んで自学自習することが等価値なのでしょう。時間を取って通学してでも聴く価値のある「講義」を提供できなければ、大学の存在意義はなくなります。

全学平均で2番目に多い回答は「説明がないと理解に限界があるので、資料のみでよいとは思わない」です。講義を聴く、資料を読むなどの一方向の学びに加え、質疑応答や議論など双方向の対話により思考も理解も深まります。3番目に多い回答は「授業支援システムやチャット等で質疑応答あれば、資料のみでよい」です。資料を読むだけの一方向では不十分ですが、ツールをうまく活用することで補える部分がありますので、遠隔授業を続けざるを得ない状況下ではそうしたツールの活用は不可欠です。

さらに、資料を読むだけでは「大学の授業としての価値がない」という厳しい見方をする学生も14.9%おり、こうした意見も謙虚に受け止めるべきでしょう。資料を読む作業は授業の本体というよりも事前学修の位置付けにし、読後はチャット等に限らずライブ配信型で質疑応答やディスカッションに充てることで、対面授業に劣らない授業方式に進化させられます。いわゆる反転授業の発想によるハイブリット型遠隔授業です。

## 大学とは学生にとって 交友やサークル活動の場か？

最後に、遠隔授業や学内への入構規制がある現状で、学生たちは何を最も不便または欠点と感じているかを

見てみましょう。「大学の友人と会えないこと」が全学平均で34.7%と突出して多く、「課題が増えたこと」が20.9%、「サークル活動等の学内活動がしにくい」が18.4%、「対面でない分、集中が途切れがちなこと」が17.3%と続きます。課題の多さが世間でもクローズアップされていますが、そうした遠隔授業手法の問題よりも、交友や学業以外の活動ができないことに学生たちは不都合を感じています。他大のアンケートでも同様の結果が出ており、結局学生は学業よりも交友や学業以外の活動が大事、と嘆く大学関係者もいます。しかしここは、大学側が教育、つまり授業の遠隔実施を最優先に進めた結果であり、学業以外の交流の場作りが大学として次に取り組む課題と解釈したいです。

図6はそのデータを学年別に集計したものです。「友人と会えないこと」に加え、「対面でない分、集中が途切れがちなこと」、「議論等、他者から触発される学び・刺激が減ったこと」が上級生と比べ1年生で突出しています。大学生生活未経験の新入生たちには格段の配慮やサポートが必要で、次年度、新入生を迎え入れるにあたっての課題です。

「課題が増えたこと」が1年生でなく2年生で目立つのは頷けます。2年生は対面授業だった1年次に課題等の授業外学修が少ない環境で学んできたので、前年度と比べて課題の負担感が一層強いのでしょうか。「卒論研究、実験等の研究活動がしにくいこと」は4年生で突出しています。遠隔授業の手法で補えない部分が多いので、これも次年度に向けた課題です。

なお、本調査結果は現在集計中で、11月下旬を目途に詳細な報告書を下記より公開します。ぜひご一読ください。

サイボウズのファイル管理を開く  
高大接続・全学教育推進センター>学生ポートフォリオ>  
2020年と順に開く

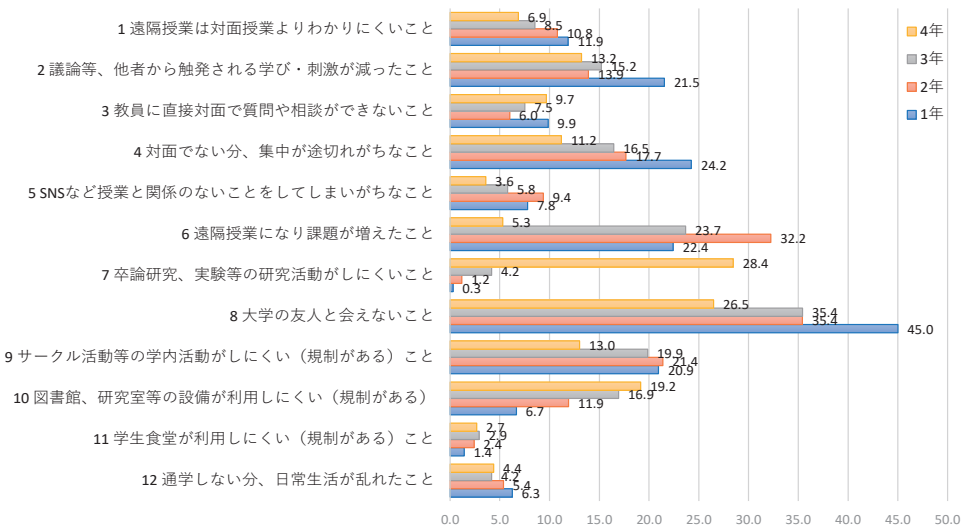


図6 遠隔事業や大学への入構規制が、不便または欠点と感じることは何か (主要要因を最大2つまで選択)